

インタビュー

鈴木ユキオ、世田谷美術館のエントランスで新作ダンスをつくる

2017年2月22日

語り手: 鈴木ユキオ(ダンサー・振付家)

聞き手: 塚田美紀(世田谷美術館主任学芸員)

■世田谷美術館のエントランス・ホールに立って

塚田:

世田谷美術館のエントランス・ホールを使うパフォーマンスシリーズ「トランス／エントランス」、第15回目は、ダンサー・振付家の鈴木ユキオさんにご登場をお願いしました。実はユキオさんには、以前も当館で踊っていただいたことがあります。館内ではなく、展示室のすぐ外の、大クヌギの木の下ですね。あれから8年近くになりますが、今回はエントランスです。この独特な空間に改めて立ってみて、どんな印象を受けましたか？



世田谷美術館エントランス・ホール(撮影:安 容子)

鈴木:

僕は、空間としては天井が高いところが好きなんです。このエントランス

も抜けがいいというか、上に向かって広がっているので、気持ちがいいです。かたちもいいですね。扇形の階段があったり、すごく特徴があって。ちょっと古い趣きもあるけれど、一方ですごくモダンというか、今でも古くない。そういうところが、立っていて気持ちいいなと感じます。

塚田:

当館のエントランスは、人によってさまざまに印象が違うようで、「とても威圧的だ」と受けとめる人もいます。ユキオさんはそういうふうには感じられなかったですか？

鈴木:

確かに、しっかりと作りこまれている空間だから、そう思う方もいるでしょう。自分は好きですね。建築的に、はっきりしている空間はいいですね。

塚田:

実際に使ってみた感触はいかがですか？

鈴木:

そうですね、ここで音を鳴らしてみたり、映像を投影してみたり、ということをしていると、当然ですけど、何も無い状態の空間とは全く違ってきます。そうしたことを自分のなかで調整する、この空間に自分のやりたいことをうまくフィットさせていくことには、やはり時間がかかりますね。

塚田：

建築としても複雑で、そこにダンスだけでなく映像も音もしっかり入れていくという、かなり意欲的な作品ですよ。さまざまに難しい判断が必要だと思いますが、ユキオさんのなかで、最初から何か目指すイメージのようなものはあったのでしょうか？

鈴木：

自分個人で作品づくりをするときはコンセプトがあって、つくりこんで、考え込んで、じゃあ今回はあの人にあれをお願いしよう、となります。ですが、今回はこの場所で何がやれるか、ということですので、まずは自分がいま興味を持っている人たちに声をかけて、そのメンバーで何ができるか、コラボレーションのなかですり合わせていくという、全く逆の方向ですし、挑戦です。

■美術、音楽、映像——コラボレーションを支える直感

塚田：

今回は、作曲の小野寺唯さん、サウンドデザインの齊藤梅生さん、映像のみかなぎともこさん、美術のいしわためぐみさんが参加してくださっています。ユキオさんはこれまでもたくさんの方とコラボレーションされていると思うのですが、今回はこのメンバーだ、ということでお声がけされたわけですね。いま興味がある人たち、とおっしゃいましたが、そのあたりの直感的な理由を、もう少しお聞かせくださいませんか。

鈴木：

まず、美術のいしわたさんですが、彼女の描く絵やオブジェは、日常のささやかなところから発信されているものが多くて、その正直さがいいなと思っていました。一見、何とということのない優しいものをつくっていますが、どこから作品をつくったのか話をきくと、とても深いところに根ざした問いから出てきているのがわかります。それで、いつか美術をやってみたいと思っていたのですが、劇場のようなところで大掛かりにやるより、今回の美術館のエントランスというのは彼女のスタンスと合うかも、という勘が働いてお願いしたんですよ。

塚田：

なるほど。

鈴木：

小野寺唯さんの音は、本当にオールマイティで尊敬しています。以前ごいっしょしたことがあり、何かの機会にお願いしたいな、と思っていました。今回、最初に音響と音作りを含めて齊藤梅生さんをお願いしたときに、梅生さんから「小野寺さんもどうかな？」と言ってきて。以前、僕の公演をふたりとも見に来てくれた時に、今度いっしょにやりたかねと言っていたので、じゃあお願いしよう！となりました。短絡的なのですが(笑)。

塚田：

なるほど、勢いというか、タイミングが合ったわけですね。

鈴木：

はい。ふつう、音楽をふたりの方に頼むことはなかなか



作品づくりの現場。手前から、小野寺唯、齊藤梅生、鈴木ユキオ

できないですが、今回、そういう経緯があって実現しました。ふたりそれぞれのいいところを出し合いながらやってくださっています。梅生さんは環境音を使いながら音をつくる方、小野寺さんはまた全く違う音作りの方で、そういうふたりが作用しあうのが面白いなと思っています。

塚田：

今回のサウンドは確かに不思議ですね。ずいぶん異なる論理の音が織り合わせられながら、高い天井に昇っていき、あるいは観客を包む。数分ごとに違う世界に連れて行かれている感じです。それもとてもさりげなく。

鈴木：

お客さんは心地よくて、70 パーセントくらい寝てしまうかもしれませんね(笑)。最後にみかなぎさんですが、以前ボディペイントしてもらって踊ったときにその映像を撮っていただいたことがあり、それがとても素敵だったので。この空間を見たときに、いしわたさんの美術を、みかなぎさんが映像にするといいのでは、と直感的にふたりが結びつきました。

塚田：

いま出てきている映像をごらんになって、いかがですか？

鈴木：

今回、「白と黒」、「影」を使いたいと伝えてあり、それをうまく活かして編集してくださっている、と感じています。あとは、僕がそれをどう使っていくのか、僕待ちだな、というのが申し訳ないんですけど。音楽の方と組んでもいつも思うことですが、僕はダンスをつくるのがとても遅いんですね。これをこうやって、と振り付けるタイプではなくて、じっくり考える時間を取る、みなさんを待たせることがとても多い。内心はすごく焦っているのですが…(笑)。

塚田：

ジャンルによっても、遅い速いはあるのかもしれませんが、ユキオさんのつくる様子を拝見していると、そのゆっくりとした時間は、非常に密度が高いといいますか、濃密ですね。説得力のある遅さ、という感じがします(笑)。

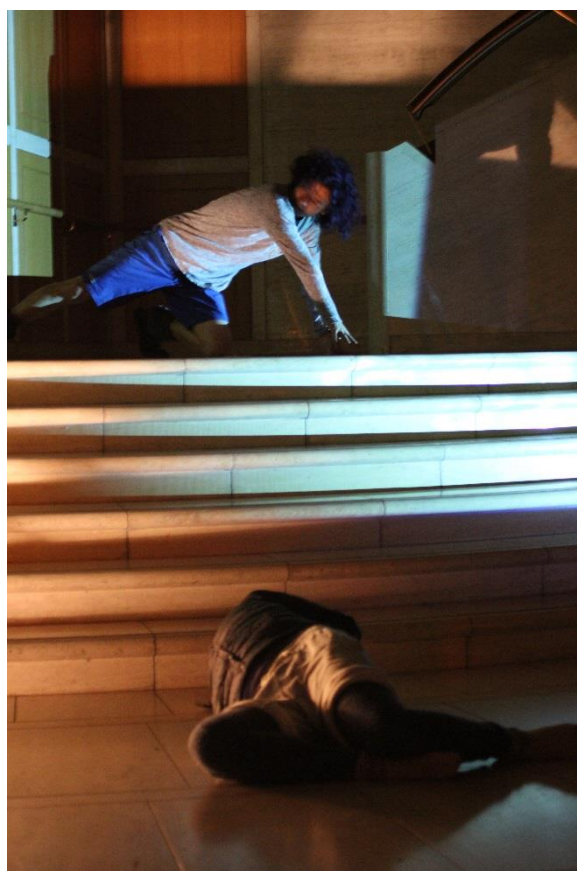
■オブジェ／ダンス、ふたつの身体

塚田：

ところで今回は、ダンサーとして赤木はるかさんも登場します。ユキオさんの身体と赤木さんの身体、あるいはふたりのダンスは、どういう関係になりますか？

鈴木：

今回は自分のソロを中心に組み立てながら、そこに赤木さんをどう組み込むかを考えていたのですが、それがじっくり来るポイントを探しあぐねているところがあって。今日試したのは、彼女にセパレートしたシーンをつくってもらってはどうか、ということです。当初、実はふたつ作品をつくりたいと考えていたのを、無理があるからひとつにしようと思ったのですが、美術館の現場で稽古しているなかで、もう一度、セパレートの発想で試してみようと思い直したところです。



リハーサル中の鈴木ユキオ、赤木はるか

塚田：
ひとつの作品のなかで、全く違う質感の時間をつくりたい、ということですか？

鈴木：
そうですね。静と動の考え方でいうと、最初、オブジェとして身体を展示する、ということを最初に思いつきました。でも、動いてもオブジェとして居られるのではないかと。それからダンスも、そんなに動かなくてもダンスの身体としてそこに居続けることはできるのではないかと。その両方を試してみてもいいのではないかと、思うようになりました。この両方を、最初は統合してやろうと思っていたのですが、それではやりたいことがよく見えなくなるのかなと思い、あくまでセパレートして、と考えています。ただ、ふたつは全然タイプが違うものなので、それを並べて見たときに、お客さんは混乱するかもしれない。本番までに、その見せ方をうまくつかめたらと思います。

塚田：
なるほど。まだまだスリリングな手探りが続きますね。本番までの2週間、どう展開するのか、楽しみです。次は公演タイトルの『イン・ビジブル』について伺いたいと思いますが、ここでいったん区切りましょうか。

※本インタビューの続きは、以下の公演時に配布する当日パンフレットに掲載予定です。

[公演情報]

世田谷美術館パフォーマンス・シリーズ「トランス／エントランス」vol.15
鈴木ユキオ『イン・ビジブル in・vísible』

日時：2017年3月9日（木）・10日（金） 19:40 開場 20:00 開演
会場：世田谷美術館エントランス・ホール（〒157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2）
会場アクセス：<http://www.setagayaartmuseum.or.jp/mguide/access.html>

定員：各日約80名
料金：予約3000円／当日3500円（中学生以下無料）※未就学児のご入場はご遠慮下さい
web予約＝世田谷美術館ウェブサイト「プログラム&イベント」より
<http://www.setagayaartmuseum.or.jp/event/list.html#pe00547>
電話予約＝世田谷美術館 03-3415-6011（10:00-18:00、月曜休）

演出・出演：鈴木ユキオ

出演：赤木はるか
美術：いしわためぐみ
映像：みかなぎともこ
作曲：小野寺 唯
サウンドデザイン：齊藤梅生
照明：加藤 泉
宣伝美術：細川浩伸
記録写真：堀 哲平
記録映像：イリベシン

制作・主催：世田谷美術館（公益財団法人せたがや文化財団）
運営：NPO法人アートネットワークジャパン